



第145号

発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長 博
 宮川
 編集人 会報編集委員長 匡
 滝澤 祥
 印刷所 須坂新聞社

学ぶよろこび

研修所感

小林 謙三

教育公務員特例法には「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と研修を義務付けている。

上高井教育会に限らず、この教育会でも同好会が全般に低調不活発になっていくと聞く。同好会へなど参加しなくても、どこか違う場所ですら教師としての研修に励んでいるというのであればよいが、果たしてどうであろうか。

忙しくて同好会へなど行っていないという。確かに忙しい。部活、生徒指導、学級の仕事、校務分掌の仕事、所属している団体や会の集まり、家庭の仕事等々。たまには土曜日の午後くらいゆっくりしたいという気持ちも分かる。ごもつともである。

しかし、本当に同好会へ参加できない(しない)理由はそういうことなのだろうか。お叱りを覚悟で言わせてもらうなら、最も大きな理由は、会員一人ひとり(自分も含めて)の勉強意欲の衰弱だと私は思っている。暇な時間があつたら参加するなんていう程度じゃ研修時間など生まれつこない。「まず〇月〇日の同好会へは参加して勉強するぞ。」と心に決めておけば、時間はなんとか作れるものだ。勉強なんだから、楽しいことより苦しいことの方が多めに決まっている。勿論、そんな勉強なんて今更必要ないという先生は論外である。

教師が本を買わなくなったという声もよく聞かされる。買わなくなったということは

容に我が身を照らしての反省や感想が語られ、充実した時間が過ごせたように思う。

私自身は地歴同好会に身を置いていたが、今年高山地区の巡検、日野地区の巡検に参加し、いい勉強をさせていただいた。講師の小布施中学校青木廣安教頭先生はじめ、係の先生方の深い研究に裏付けられた説明や案内に、参加者は喜びと共にいよいよ次回へ期待をふくらませている。

恒例の夏休みのバスによる夏期巡検は、関田峠越えで信越県境の深雪地帯に足を延ばし、市川健夫東京学芸大名誉教授からたくさんのお話を教えていただいた。夕闇の中、帰路を急ぐバスにゆられる参加者には充実した一日の快い疲労感が漂っていた。

またここ三年間、夏休みには信濃教育会の書写書道基礎講座の世話役をさせていた。先生方の熱心な姿に心打たれることが多い。その講師の一人である北原青雲先生から記念に扇子をいただいた。それには先生の見事な直筆で次のことばが書かれていた。

少にして学べば即ち
 壯にして為すことあり
 壯にして学べば即ち
 老にして衰えず
 老にして学べば即ち
 死して朽ちず

(江戸時代の儒者藤一齋のことば)
 (高山小)

教育会だより

- 7・8 第4回常任委員会
- 12 教研集会分科会長・司会者会 於教育会館
- 16 第5回代議員会
- 17 上高井教育会報第144号発刊
- 8・5 上高井教育七団体結成会 於教育会館
- 9・2 上高井教育七団体連絡会代表者会 於教育会館
- 28 第5回常任委員会
- 3 教研集会中間連絡会 於教育会館
- 12 第6回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告会(1)
- 26 上高井教育会報第145号発刊
- 4 上高井教育研究会 於墨坂中学校
- 21 第6回常任委員会
- 22 教育課程研究協議会
- 上高井教育会報第146号発刊—研究委員会中間報告

須高の自然 ⑤

都住のヒイラギ(♀)
 小布施町天然記念物

堀米 富平



所在地 小布施町雁田七八
 九番地、所有者 呉羽敏正
 地上〇・二mの高さから四本の幹に分かれて立ち、枝を頭上に円錐状に樹下暗しと広げている。推定樹齢七〇〇年。南信の高森町下市田のヒイラギと測定 根回三・四(m)枝張

東五・九 西五・八 南五・九 北四・二 樹高九・二

幹に斑状に緑色地衣類、日陰側にスギゴケ類が着生し奥ゆかしさを倍加している。葉縁のとげはなくなっている。

ヒイラギは関東以西の山地に自生し、県内では木曾伊那地方南部丘陵帯にわずか見られるが、一般的には栽植である。このような古木巨木は北信では極めて珍しく学術的には貴重といわざるを得ない。南信の高森町下市田のヒイラギ巨木も見るべきものである。

都住は古く弥生土器も数々出土しており、また中世文化の栄えた地でもあることから故あって植えられ、愛育されて来たものであろう。

ヒイラギはひいらぐ(痛い)の意、晩秋小白花を初雪かと思わせる頃つける。(高山小)

夏期研修会に参加して

(今年度の夏休みも多数の先生方が研修会、講習会に参加されました。その中から得られた貴重な体験や感想をお寄せいただきました。)

宇原川流域・土石流

発生源崩落地の自然調査

実施日一九九一・八・五

堀米 富平

理科同好会が今回調査した宇原川は、一九八一年(昭和五六)に上流崩落により大災害を流域一帯に引き起こした川、酸性川の多い須崎市で水質の最もよい川、魚の住む川である。また旧大笹街道が、この宇原川に沿って峰の原に抜けていることで古くから人々の生活にかかわり深い川である。街道沿いに当時の石仏が残っている。

会員は八時三〇分に仁礼小学校に集合、車に分乗して黒門までその先は徒歩。講師は動物・昆虫を山岸保先生、植物を堀米富平が担当した。

宇原区付近では上流に長雨が相当続いてても水は澄んでいるのが常であるが、この日もかつての泥流災害は思いもよらない澄んだ落ち着いた流れであった。河床全幅ツルヨシが茂り、ツリフネソウ オオミゾソバ シリメカセンダングサなど生い茂る中に根を洗うように水が流れている。防災復旧記念碑庭に帰化植物が多出、驚かされた。オオニキシソウ、アレチウリ、アレチヌスビトハギなど。

曲屋敷砂防堰ダムは、堤長

一四六m高さ一四m貯砂量一一〇万m³、この河の十余を数える砂防ダムや谷止工ダム中最大、高さで1/2以上砂で埋まり、ダム内に発達した湿性林にアオジの囀りが聞こえる。

金山第二ダムは、両側の山が迫る谷に作られ、急峻である。この辺まで道に面した山はスギやカラマツ造林がみごとである。近くの大谷洞穴に縄文章創須坂市最古の土器が出土している。

黒門付近両岸には土石流の爪跡がすぐカラマツ、スギ高木が流し去られている。谷止工ダムには千曲川魚組

が相当続いてても水は澄んでいるのが常であるが、この日もかつての泥流災害は思いもよらない澄んだ落ち着いた流れであった。

大字かな講習

田中 尚子

七月三十一日、八月一日と二日間にわたる夏期書道講習会が高山村牧区民会館で開催された。

講師の北島靖啓先生には、かなの成立・歴史からはじまって、かな書道とその用具の

取り扱い方・執筆法、実技、

放流に依るマスが、六、七cmに生長、水中を群遊していた。廃田したワサビ田にカモシカが姿を現していた。岩礫地にキベリタテハ、クジャクチョウなどが水気のある地面に下りて水を吸っている。

ロットの沢崩落地、標高一四五〇m、崩落断崖幅一〇〇m、高さ四〇mは崩落岩砂量の多量さを目の前に見上げた。固い別所層の上に弱い泥岩層が厚く見られる。崩落斜面に植物が徐々に復帰しつつある。サワシバ、ダケカンバ、ニシキウツギ、フサザクラ、オノエナギ等の幼樹が根を深く下し、森林を復活しようとしている。下流ではススキ、アカマツ、シラカバが復帰。パイオニアであるのに比し、植生復帰。パイオニア種の構成が著しく異なる。

流域の動物・植物を観察し、魚の住む川、崩落現地をつぶさに調査観察できた。(高山小)

作品の批評を懇切丁寧に指導していただいた。

私は、実技の時の筆の動きが早くながちであった。手本を見てゆっくりと書いていくつもりだか、どうしても早くなってしまう。

墨の香の中で、書いては先

生にみていただき、又書く。数時間がまたたく間に過ぎていく。まさに緊張の連続であった。かな一文字一文字を折らあたり、に気を付けて書いていく。

かなでは書線が大切であり、転折に気をつけ書いていく。私の場合は折が弱くなってしまうのである。

しかし、速くなりがちな筆に向かつて「ゆっくり」と心の中で話かけて書いていった。ゆっくりと。ゆっぴりと思っても速くなる。先生の線を見て、また書いてみる。

その内次のご指導があり、まさに消化不良のまま、練習、また練習の連続だった。が、不思議なことには習いたてのかなが、講座が終わる頃には、少しは形になっていった。本当にうれしかった。

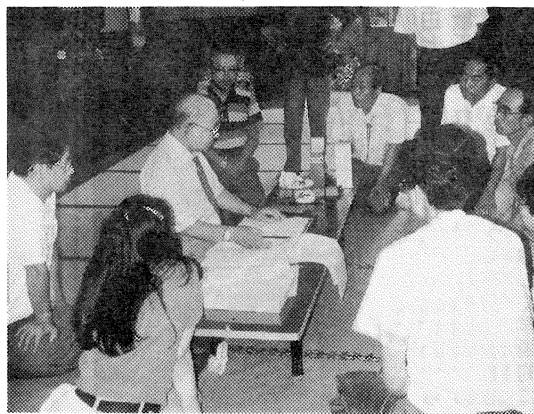
かなの練習では、筆の動きに注意を払う。

墨の濃淡、つけ方も同様である。濃すぎると線がのびない。むしろ淡い感じが良いようである。硯の中の筆の墨のつけ方も厳しくご指導いただけただけはありがたかった。

私は一気に墨をつけてしま。だから、はじめの文字がにじんできてしまう。すっきりした納得のいく線がでない。

先生の線には力強くても、今にも消えそうな、それでいて消えず連続する流れが感じられる。「どうしたらあの線が出るのだろうか」。と同じ箇所でも墨をつけてみる。しかし、先生の線には近づけない。こんな思考をめぐらしつつ次々と書いていく。

この両日、書に没頭でき、二学期からの毛筆指導への励



みにもなった。教師とは本当にありがたい。

又この講習会では北島先生を囲んでの昼食会、お茶会もある。その雰囲気が良い。毎年この講習会には参加しているが、毎回、先生のお人柄に心打たれるものがある。指導いただく内容も変化に富み、すばらしい。今年は小三の息子にも学ぶ雰囲気味わせた。ことができてうれしかった。

(高山小)

パソコン講習会 に参加して

山辺 和夫

三日間行われた今回のパソコン講習会では、一日目「Logo.writer2 二日目「Lotus1-2-3 三日目「Basic」というスケジュールであった。

第一日目の講習では、ハードウェア（富士通FM-TOWNS）そしてソフトウェア（Logo.writer）を用いて行われたわけであるが、当初、自分の中では日本語でメカを動かすというだけの知識

だった。実際に作動させてみると日本語の命令文には慣れていないが、日本語を多少知っているからかわからないが、機械の持っている言葉とのギャップ

が感じられた。

次に問題となったのが入力の形式である。Logoは、表の面と裏の面をもっており、それぞれのプログラムを裏の面に書き、表の面へもどって呼び出すことができる。これは他のプログラミング言語でいうとサズハーチンの型に似ていると思った。そしてこの講習が進むうちに、これはグ

ラフィックを行うには都合のいい言語であることが、実験として、感じられた。このソフトを学校で扱った場合、低い学年から、コンピュータに慣れる意味でも取り入れやすいソフトであると感じた。

二日目のLotus1-2-3というソフトは、一つのソフトで、表計算・グラフ・データベース等の機能を使用できる統合型ソフトである。そして利点としては、複数の機能をもっているのに、フロッピーの差し替え等の手間がいらない。また、それぞれの機能の間でデータを共用することができる、それぞれの機能を使う時の操作が、同じような手順でできる。ということが挙げられ、広く利用されている講習会では、一つ一つ段階的に進んでいくてくれたことも助かり、扱い方が理解できてきた。

三日目はBasicでは、とにかく動かしてみなければというところで、簡単な所から始めていった。これは授業でBasicを扱った場合、どのように進めていけば良いのかという点からも何か得たような気がした。

講習会を通して、とにかくやってみなければ、ということとを強く感じ、またこのような機会があれば、できるだけ参加したい。いろいろご指導ありがとうございます。

(高山中)

研修会で得たもの

水泳指導の中で...

原 ちえ子

私は、今年教師としての一歩を踏み出した。毎日驚きと発見の連続である。

二期が始まり、教室へは真っ黒に日焼けして、少し遅くなった四年梅組の28人が集まってきた。

私は、研修を受けながら、いつもこの28人との生活を思い出す。そして、子供たちの素晴らしさと、自分の未熟さを思い知らされるのである。

去る七月一日、須坂市民プールで、市水泳協会の中村理

一先生に水泳指導について教えていただいた。その頃、私はうまく泳げない子供たちを前にして、困り果てていた。

必死に前へ進もうと手足を動かしているにもかかわらず、なかなか前へ進まない子、中には、すぐ水を飲んでしまいう子もいた。

どうしたら、もっと楽に泳げるようになるかを考えていたが、なぜ泳げないのかが分からないのだから、解決の糸口は見つからなかった。

息つきや平泳ぎのキックなどについても、一つ一つ丁寧に教えていただいた。私もこ

研修では、実際にプールへ入り、まずバタ足を練習した。足首を柔らかくし、脚全体で水を打つことを教えていただいた。自分で練習するうちにバタ足のうまくなってきた。

供たちの足が見えてきた。次に、手のかきを練習した。パチャパチャと水を打ってしまいう子や、横へ手をかいてしまいう子には、親指から入水し、まっすぐにかくように指導すれば良いことを実際に泳ぎながら教えていただいた。手でかきながら、水中を歩いてみると、「水をかく」ということが実感できた。

息つきや平泳ぎのキックなどについても、一つ一つ丁寧に教えていただいた。私もこ

のように、一つずつ、細かく体を通して教えていけばよかったのだと気づいた。学校へ戻り、子供たちに私が習ったことを話し、練習させてみた。

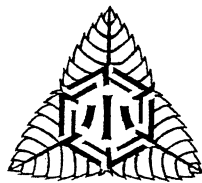
何を教えたらよいか戸惑っていた時は、子供たちが伸びようとしている真剣な姿が見えなかったのに、今はうまくなるうと必死になっている姿が見えてきた。研修がきっかけで、私は子供たちの伸びる力を感じることができた。

やがて、子供たちは自分の力で長い距離を、前よりずっと楽に泳げるようになった。私は子供一人ひとりの成長と努力に心から拍手を送った。(日野小)

当時、長島亀之助校長先生であったが、法政大学講師古田拓先生がこの地を尋ねられ、自然と人が調和している姿に感銘され、作詩された。作曲は当時本校に在職された高橋広忠先生によってなされた。

須坂小学校

校章・校歌めぐり ⑭



本校の校章は、三枚の桐の葉と須坂藩堀家の亀甲紋の中へ「ス」を圖案化したもの。「小」の字によって構成されている。

桐の葉は、平安時代諸国にたくさんあるが、この須坂一帯に桐の木が多く自生し繁茂していたことに由来し「桐原庄（くぬぎはらしよ）」と呼ばれていたことに因んで用いられた。また、亀

甲紋は、11代須坂藩主堀直格が寛政年間に藩校「立成館」を発足させ、この立成館が後の「本立学校」の前身となりさらに発展して今日の須坂小学校となったことに由来しており、その中に「ス」を圖案化した。さらに、小学校の「小」は、以前は「学」を使っていたが、最近になってこの字に改められた。

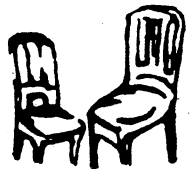
校歌は、昭和29年、須坂市制が施行され校名を須坂市立須坂小学校と改称し、創立80周年事業及び式典を挙行し、新たに制定された。

須坂小学校校歌

Musical score for the school song. It includes a title '須坂小学校校歌' and a composer '北島秀樹'. The score is written in G major and 4/4 time, with lyrics in Japanese. The lyrics describe the school's location and its history.

(北島秀樹)

火ばち談義



こらこら、先生を 分析するんじゃない!

武田 洋幸

自分の担任している四年生の言葉を集めてみると、子どもの愛らしさがよくわかる。ちよっと生意気なところも出てきた。しかし、まだまだ、十分すぎるくらい子どもだ。それをうらやましくさえ思う。図工の時間、ステンドグラスを作る教材セットをあげると、10色のカラーセロファンが入っていた。大切そうに注意深く取り出し、十枚あるか確かめる。

小学四年生

関谷 僚子

「ああ、きれいだなあ。」男の子がまぶしそうにつぶやく。「あれっ、一枚無いと思ってたら、青と黄色が重なって緑になっていた。あー良かった。」ちよっとびくっとしながら、女の子が不器用そうに、すべって重ねにくいセロファンを袋にしまう。インスタント寒天ゼリーを皆で作った。味はいちご、メ

ロン、コーヒ。六十一人分。「私が袋を読みましよう。なべに八十度以上のお湯を千cc入れて、えーと、袋の中の粉を全部入れ、一分間かきまぜます。」

「いち、にーい、さーん：これで十パイ二千cc。」「あ、お湯がわいたわいた。」「ぼくがやりたい。もう粉入れてもいいね、先生。」「9のところから、赤い針が一回りするまで見ていてね。」「あーっ、もう固まってきてるみたい。だって表面にしわがよってるもん。」

「ね、先生、おかわりもたっくさんあるよねー。」嬉しくてたまらない風に、目がキラキラ輝いている。お湯が沸いたり、粉が水に溶けたり、きれいな色水のよなゼリーをおたまですくって、型に入れる作業など全てに胸を高鳴らせる。男の子は待ちきれず、指をつっこみ「あー、おいしい」と言いニタニタしている。なんて素直なんだろう。時には喜び、時には悲しみに満ち、「どの瞬間もかけがえのない鮮やかなものなんだ」と思うこのごろ。(須坂小)

「ヨーグルトを一人で食べていたら兄が『賞味期限、切れてるよ』と嘯いた。四日ぐらいいいと思いい、全部平らげたら急に腹に激痛が走ってきた。すると母は『赤ちゃん産むときなんて、もっと痛いんだよ』と私に言ってきた。母は一体私に何を言いたかったのだろう。」

「父に『スポーツ新聞を買ってきてくれ』と頼まれ、買いにいった。家に帰って見たらエッチな記事ばかり載ってて、スポーツの記事なんて一ページしか載っていなかった。喜んでみる人がいるから売ってんだろなあ。」

「あーうるさいな。人がちよっと真面目に勉強してるっていうのに、またうちの父ちゃんと母ちゃんは口喧嘩してる。あーうるさい、うるさい。頼むから静かにしてくれ。じきにもっとすさまじい事に

なるに違いないだろう。やだねー、うおー頼む、静かにしてくれ。」

夏休みが終わったのこの数日間に書かれた生徒の文章。久々に子供らと会い、新鮮な気分で生活記録を読んでいて「こんなことが心に残るのか」と驚いた。私にとっては「この程度」のことであって

アンチ巨人であろうとしたことがある。長らく「巨人・大鵬・たまご焼き」世代の素朴な巨人ファンであったのだが、あるとき、もう巨人ファンであることをやめようと決心した。言ってみれば、転向したのである。「常に勝ち続けること」がまじめに至上命題となっている集団というものは、相対的に薄気味悪いものである。躰かないというところがそんなに尊いか。

アンチ

井澤 聖次

も、子供本人にすれば一日の重大ニュースであり、気にかかったことなのであろう。彼らだけが幼ないとは思えない。中学三年生でも大人の様子をよく見ている。

翌日も新聞は朝・昼・夕と、分かり切っている試合経過を丹念に辿り楽しんだものだが、それが逆転した。ただ逆転したのみでなく、いささか過激になった。なまじアンチという看板に付け替えたためであらう。正統のアンチと転向のアンチとは、こういうところ

が違うのである。しかしながら、その過激さ加減は何かヘンだった。「可愛さ余って憎さ百倍」ということも愛しいとも毛頭思っちゃ

「関係ネーヨ」という捨てゼリフがある。これは、思っていた以上に決定的な断絶の宣言なんだなと、遅まきながら気がついた。あからさまな反対・抗議・抵抗は、言ってみれば、まだ希望を抱いているのである。全くその対象に志向性のないものには、愛も憎も抱きようがない。文字通り「関係」のもちようがないのである。

巨人が勝とうが負けようが、ごく自然に、平静に「関係ネーヨ」と感じられたとき、本当の意味で巨人を捨てたことになるのだろう。かくして、わたしはアンチ巨人であることとして、アンチ巨人であることもやめた。やはり、野球は見るものではなくするもの、勝負は「勝ちゃあいい」というものではなく楽しむものである。(仁礼小)

夏休み、研修に参加された会員の原稿をいただき、また本会常任委員であり、信教基礎講座の世話役の小林先生には巻頭言を戴きました。お忙しい中まことにありがとうございました。(田中・正木)

編集後記